《論文》

アッバース朝後期バグダードにおけるワアズ

―都市における権力者・知識人・民衆の接点としての説教―

村山さえ子

はじめに

アンダルス出身の旅行家イブン・ジュバイル Ibn Jubayr（六一四／一二一七没。ヒジュラ暦／西暦。以下同）はメッカ巡礼を果たした後、五八〇年サファル月三日／一一八四年五月一六日にバグダードに到着し、学問と説教の集会 majālis ʿilm wa waʿẓ に五回以上足を運んだ。「われわれがすでに西方［イスラーム］地域で親しんだ演説家たちのものと比較して、彼らのものはいずれも実に見事なものであると感じた」[1]と述べ、その様子を活き活きと描写した。一三日間のバグダード滞在中の記録は説教巡りのようである。[2] 特にカリフ＝ナースィル（在位五七五～六二二／一一八〇～一二二五）や母后ズムッルド・ハートゥーン（五九九／一二〇三没）も臨席した、カリフ宮殿前のバドル門で行われたイブン・アルジャウズィー Ibn al-Jawzī（五九八／一二〇一没）の説教を聴いた際の記述は詳細かつ情感溢れている。メッカやメディナでも名のある人々の説教を聴いたイブン・ジュバイルだが、[3]「この比類なき人物の講話と比較するとそれらはいずれも見劣りする」とイブン・アルジャウズィーの説教を絶賛する。また、イブン・ジュバイルは他にも複数の「説教者の講話

の席に出た」と述べており、[4]当時バグダードで生活する人々は断食月や巡礼月以外でも、日常的に説教を聴く機会があったことが窺える。本稿では、このような都市における知識人の活動の一部であり、権力者や民衆がともに聴いた説教に焦点をおき、都市の社会関係を考察する。

第一章　先行研究と史料

本稿で取り上げる説教は、金曜正午の集団礼拝の前や二大祭の礼拝に際して行われ、時の権力者の名を冒頭に述べる公の説教＝フトバ khutba ではない。場所や時間的規定は特になく、任意の会合などで神への畏れを喚起する教訓的な内容であるといわれるワアズ wa'ẓ である。アラビア語ではフトバを行う者をハティーブ khaṭīb といい、ワアズを行う者をワーイズ wā'iẓ と使い分けている。[5]

第一節　先行研究

ペダーセンはさまざまな説教、フトバ、ワアズ、タズキール tadhkīr、カサス qaṣaṣ について、語源、語義とクルアーンでの用法を確認し、正統カリフ時代の公認と非公認のカーッス qāṣṣ から一九世紀カイロに関する記述までを概観した。[6]多くのウラマーが非公認の説教師を厳しく批判したのとは対照的に、法学やハディースの講義だけでは満足しない民衆は、説教師の情緒的な語りに傾倒したという。シュワルツはイブン・アルジャウズィーの著作『説教師たちの書』を校訂し、英訳と詳細な解題を行った。[7]

バーキーはペダーセンの論を継承し、さらに発展させた形で説教師への批判だけではなく擁護の書も取り上げた。バーキーは説教批判の書に描かれた、批判の根拠となる行為、特に民衆の数々の「新奇な＝ビドア bid'a」行為に注目し、

そこから当時の社会のいきいきとした民衆文化 popular culture の在り様を読み解く重要性を提示した。[8]

レンターガムは、宗教的知的あるいは政治的軍事的エリートだけではなく、商人や町の人々 ʿāmma、アイヤール（ʿayyār 任侠無頼の徒）などを取り上げ、各集団への帰属意識や社会的活動、それぞれの権威・権力の源泉と適応範囲や関係性を詳細に論じた。ワーイズについてもカーディーやハティーブと比して取り上げている。[9]

その他、説教師個々人に注目した研究としては一二―一三世紀アンダルスとマグリブを対象にしたジョーンズ、[10] マムルーク朝を対象とする塚田の研究もある。[11]

第二節　課題と史料

説教師という存在は長くウラマーの間で賛否両論にさらされていた。しかし、冒頭で取り上げたイブン・ジュバイルの記述から数多くの聴衆を集め、非常に高い人気を得ていたことも明らかである。賛否の差が主に説教師の個人の属性や資質に起因するものなのか、聴衆の側の諸条件や社会的状況によって生じたものであるかは、これまで十分に考察されてこなかった。

本稿では地域時代を絞り、ワアズに焦点を当てる。地域はバグダード、時代をセルジューク朝君主トゥグリル・ベクがシーア派ブワイフ朝を退けてバグダードに入城し、アッバース朝カリフからスルターンの称号をえて支配権を承認された四四七／一〇五五年から、モンゴル軍によってバグダードが陥落しアッバース朝カリフが殺害された六五六／一二五八年までの約二百年間とする。五四七／一一五二年スルターン＝マスウードの死去以降は、セルジューク朝の分裂とカリフの復権の動きがあり、全体として、カリフとスルターンが対抗しつつ共存する政治状況にあった。本稿では便宜上アッバース朝後期と呼ぶ。この時期に、既述のイブン・アルジャウズィーや、スーフィーとして知られるアブー・アンナジーブ・アッスフラワルディー Abū al-Najīb ʿAbd al-Qāhir al-Suhrawardī（五六三／一一六八没）[12] など著名な人物が活躍しており、

他の説教に比して豊富な情報を得られる。参照とする史料は年代記、法学派別の伝記集など、出来うる限り同時代史料を用いる。[13]

次章では、ワーイズと呼ばれた人々の知的社会的背景を整理する。ウラマーの中でワーイズのみが持つ特徴があるのか、確認する。第三章では具体的な事例をもとにワアズを行った場所や状況の傾向を分析する。それぞれの場所の持つ社会的政治的背景と、ワーイズとの関係性について考察する。最終的にはアッバース朝後期バグダードという時代・地域の政治的・社会的状況を反映したワアズの特徴について明らかにする。

なお、説教集については検討の対象としない。本稿では、説教師の行動とその背景と結果に注目しており、説教集はいつどこで聴衆に向けて行われた内容であるのか確認が取れないものが多いためである。

主な史料と本文中の略号は以下の通りである。

Abū Shāma: Abū Shāma, *al-Dhayl ʻalā al-Rawḍatayn*. al-Qāhira, 1947.

al-Bidāya : Ibn Kathīr, *al-Bidāya wa al-Nihāya*. 14vols. Bayrūt, 1991.

al-Dhahabī: al-Dhahabī, *Ta'rīkh al-Islām wa Wafayāt al-Mashāhīr wa al-Aʻlām*. 49 vols. Bayrūt, 1999.

Ibn al-Athīr: Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta'rīkh*. 13 vols. Bayrūt, 1982.

Ibn al-Bannā' : Ibn al-Bannā', *Ta'rīkh*. transrated and edited by George Makdisi. as Autograph Diary of an 11th-Century Historian of Baghdād, Part 2, *Bulletin of the School of Oriental and Afrian Sutuies（BSOAS）*, 18（1956）, Part 3, 4, 5, BSOAS, 19（1957）.

Ibn al-Dimyāṭī : Ibn al-Dimyāṭī, *al-Mustaqād min Dhayl Ta'rīkh Baghdād*. Bayrūt, n.d.

Ibn al-Dubaythī: Ibn al-Dubaythī, *Dhayl Ta'rīkh Madīnat al-Salām*. 5vols. Bayrūt, 2006.

Ibn al-Fuwaṭī: Ibn al-Fuwaṭī, *al-Ḥawādith al-Jāmiʻat wa al-Tujārib al-Nāfiʻa fī al-Miʻa al-Sābiʻa*. Bayrūt, 2003.

Ibn al-ʻImād : Ibn al-ʻImād, *Shadharāt al-Dhahab fī Akhbār min Dhahab*. Bayrūt, 1979.

Ibn Jubayr : Ibn Jubayr, *Riḥlat Ibn Jubayr*. al-Qāhira, 2000.

Ibn Khallikān : Ibn Khallikān, *Wafayāt al-A'yān wa Anbā' Abnā' al-Zamān*. 8 vols. Bayrūt, n.d.

Ibn al-Najjār : Ibn al-Najjār, *Dhayl Ta'rīkh Baghdād*. 3vols. Bayrūt, n.d.

Ibn Rajab : Ibn Rajab, *Kitāb al-Dhayl 'alā Ṭabaqāt al-Ḥanābila*. 2 vols. Bayrūt, n.d.

Ibn Sā'ī : Ibn Sā'ī, *al-Jāmi' al-Mukhtaṣar fī 'Unwān al-Tawārīkh wa 'Uyūn al-Siyar*. Baghdād, 1934.

al-Muntaẓam: Ibn al-Jawzī, *al-Muntaẓam fī Ta'rīkh al-Mulūk wa al-Umam*. 17 vols. Bayrūt, 1995.

Mir'āt.A : Sibṭ Ibn. al-Jawzī, *Mir'āt al-Zamān fī Ta'rīkh al-A'yān*. Ankara, 1968.（四四八～四八〇／一〇五六～一〇八八年を収録）

Mir'āt.H : Sibṭ Ibn. al-Jawzī, *Mir'āt al-Zamān fī Ta'rīkh al-A'yān*. 2 vols. Haydarābād. 1951-2.（四九五～六五六／一一〇一～一二五六年を収録）

Mir'āt.M : Sbṭ Ibnb. *al-Jawzī, Mir'āt al-Zamān fī Ta'rīkh al-A'yān*. 2 vols. Makka, 1987.（四八一～五一七／一〇八八～一一二四年を収録）

al-Quṣṣāṣ : Ibn al-Jawzī, *Kitāb al-Quṣṣāṣ wa al-Mudhakkirīn*. ed. & tr. M. L. Swartz, Bayrūt, 1986.

T.Baghdād : al-Khaṭīb al-Baghdādī, *Ta'rīkh Baghdād*. 15 vols. Bayrūt. 1986.

Ṭ.al-Ḥanābila : Ibn Abī Ya'lā, Abū al-Ḥusayn, *Ṭabaqāt al-Ḥanābila*. 2 vols. Bayrūt, n.d.

al-Mundhirī : al-Mundhirī, *al-Takmila li-Wafayāt al-Naqala*. 4 vols. Bayrūt, 1984.

al-Subkī: al-Subkī, *Ṭabaqāt al-Shāfi'iya al-Kubrā*. 7 vols in 10. Jīza, 1992.

第二章　ワーイズ の知的背景と社会的背景

アッバース朝後期にバグダードでワアズを行った、あるいはワーイズと呼ばれたことが確認できる人物二四八名（うち女性一二名）を検討対象とする。その没年を基準に約五〇年ごとに、第一期（四四七～五〇〇年）、第二期（五五〇年まで）、第三期（六〇〇年まで）、第四期（六〇一年以降）と分けて集計した。各期の人数は四〇名、四九名、八〇名、六七名であり、史料で没年を確認できなかった者は一二名であった。

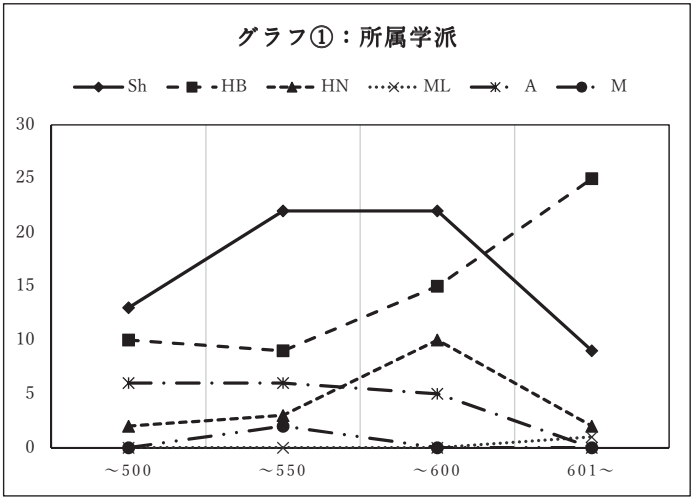
第一節　知的背景

（一）所属学派

法学・神学上の学派別に集計した。結果は「グラフ①」の通りである。以下、本稿では四法学派はシャーフィイー派＝Sh派、ハナフィー派＝HF派、ハンバル派＝HB派、マーリク派＝ML派と、神学派はアシュアリー派＝A派、ムウタズィラ派＝M派と略号を用い、シーア派はシーア派と表記する。

法学派別に見ると、対象年代を通してもっとも多かったのがSh派であった。一人の人物がSh派かつA派である場合には双方で計上した。（　）にSh派かつA派の数を示した。次いで多い順に、HB派、HF派、A派である。シーア派、M派、ML派についてはごく少数であった。所属学派不明は各期を通して三分の一以上であり、後半に増加する傾向がみられる。[14] なお、学派を変えた者は双方で計上した。

所属学派の傾向の変化をみると、Sh派は第一期が最も多く、第四期にその数と比率を減らしている。これと入れ替わるようにHB派は増加した。HF派は第三期が一〇名と最も多いが、Sh派、HB派に比べれば少ない。



	～500	～550	～600	601～	不明	合計
Sh(&A)	13(4)	22(6)	22(5)	9	1	67
HB	10	9	15	25	0	59
HN	2	3	10	2	2	19
ML	0	0	0	1	0	1
A(&Sh)	6(4)	6(6)	5(5)	0	1	18
M	0	2	0	0	0	1
シーア派	0	1	1	1	0	3
不明	14	17	32	30	9	102
	40	51	78	67	12	248

各期ごとの比率

	～500	～550	～600	601～	不明	合計
Sh	32.5%	43.1%	28.2%	13.4%	8.3%	27.0%
HB	25.0%	17.6%	19.2%	37.3%	0.0%	23.8%
HN	5.0%	5.9%	12.8%	3.0%	16.7%	7.7%
ML	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	0.4%
A	15.0%	11.8%	6.4%	0.0%	8.3%	7.3%
M	0.0%	3.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%
シーア派	0.0%	2.0%	1.3%	1.5%	0.0%	1.2%
不明	35.0%	33.3%	41.0%	44.8%	75.0%	41.1%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

法学派が明らかな人物の小計で見ると、第三期がもっとも多い。要因としては四五九／一〇六七年のSh派のニザーミーヤ学院が創設されて以降、多くのマドラサが建設されたことが挙げられよう。マドラサは法学を教える・学ぶ以外にもワアズを行う場所としても活用された。この点は第三章で改めて取り上げる。

法学者全体の傾向を見るため、対象年代は六〇〇年までであるが、レンターガムの研究を参照する。バグダードでマドラサの教師であったウラマーのうち、Sh派一四三名、HB派六四名、HF派五八名である。[15] 時代区分を合わせてワーイズをみてみると、Sh派五七名、HB派三五名、HF派一五名で、Sh派の多さは顕著である。また、教師の人数でいえば、HB派はHF派よりやや多い程度であるが、ワーイズではHB派が倍以上である。

神学派については、Sh派かつ神学上はA派である人物は第三期まで確認できる。学問上の解釈と政治上の立場の違いから、A派とHB派が激しく対立していた五五〇／一一五五年前後と符合する。[16]

シーア派の場合、説教師はワーイズではなく、宣教師 dāʿī と記述されることが多い。シーア派として扱ったガズナウィー Abū al-Ḥasan al-Ghaznawī（五五一／一一五六没）は、宮殿モスクやスルターン・モスクでワアズを行っていたとされる時期の所属学派は不明である。晩年にシーア派に転向したとも記述されるが、シーア派宣教師として活動したのか、その委細については不明である。本稿ではシーア派に属する人物の著作を参照していないため、偏りがあることは否めない。

（二）その他の修得学問

法学以外でもっとも多く修得した学問分野としてハディースが挙げられる。*T.Baghdād* やその補遺などハディース伝承者集を多く用いていることも影響している。[17]

法学に次いで文学が各年代を通して比較的高い割合である。イブン・ジュバイルの記述にもイブン・アルジャウズィーを「[修辞学の] 作詩法と散文のカラーム（言葉、議論、教義神学）の手綱を巧みに御する」[18] として称賛する。優れた散

文や詩は、説教の際に聴衆を引き付けるには効果を発揮したことが窺える。

それ以外では、タサウウフ（神秘思想）とズフド（禁欲主義）は第一期が最も多い。第三期以降ジーラーニー ʻAbd al-Qādir al-Jīlānī（五六一／一一六六没）[19]や、アブー・アンナジーブ・アッスフラワルディーのようにスーフィーとしてよく知られる人物が散見されるが、人数、割合ともに大きな変化はない。

修得学問や背景について記述がないものは、各期五％未満と低い割合であり、ワアズを行うには、既存の学問の習得が必要となっていた。

（三）師弟関係

イスラーム諸学の修得方法について、暗記及び口述が重要視されてきたことは既に多くの研究によって指摘され、特に近年は免状、許可証を意味するイジャーザ ijāza についての詳細な研究が複数発表されている。[20] しかしワアズに関して師弟関係が確認できるのは数例である。イブン・アキール Ibn ʻAqīl（五一三／一一一九没）はアブー・ターヒル・ブン・アルアッラーフ Abū Ṭāhir b. al-ʻAllāf（四四二／一〇五〇没）に師事した。このアブー・ターヒルの師がイブン・サムウーン Ibn Samʻūn（三八七／九九七没）で、イブン・アルジャウズィーが『説教師の書 *Kitāb al-Quṣṣāṣ wa al-Mudhakkirīn*』で鑑として挙げている人物である。[21] 他には、イブン・アルジャウズィーが学んだイブン・アッザーグーニー Ibn al-Zāghūnī（五二七／一一三三没）、他方、イブン・アルジャウジー、アブー・アンナジーブ・アッスフラワルディーから学んだ者が数名いたとされる。

ハディースの大家やニザーミーヤ学院の教授のように、一〇名を超える師弟関係・伝承関係を持つワーイズは確認できなかった。師のワアズの集会を継ぐという記述もイブン・アルジャウズィー親子以外、ほとんど見られない。優れたワーイズであったことの表現として、彼にはワアズにおける（優れた）弁舌があった、[22] 優れた腕前であった[23]という記述がみられる。これらは個人の技量に対してなされており、師から受け継ぐ権威より、ワーイズ個人の力量が評価を左右したこと

が窺える。

第二節　社会的背景

（一）地理的背景：出身地

出身地について、バグダードとそれ以外の地域を、イラク・ジャジーラ、イラン以東、シリア以西、その他、不明に分け集計した。（グラフ②）

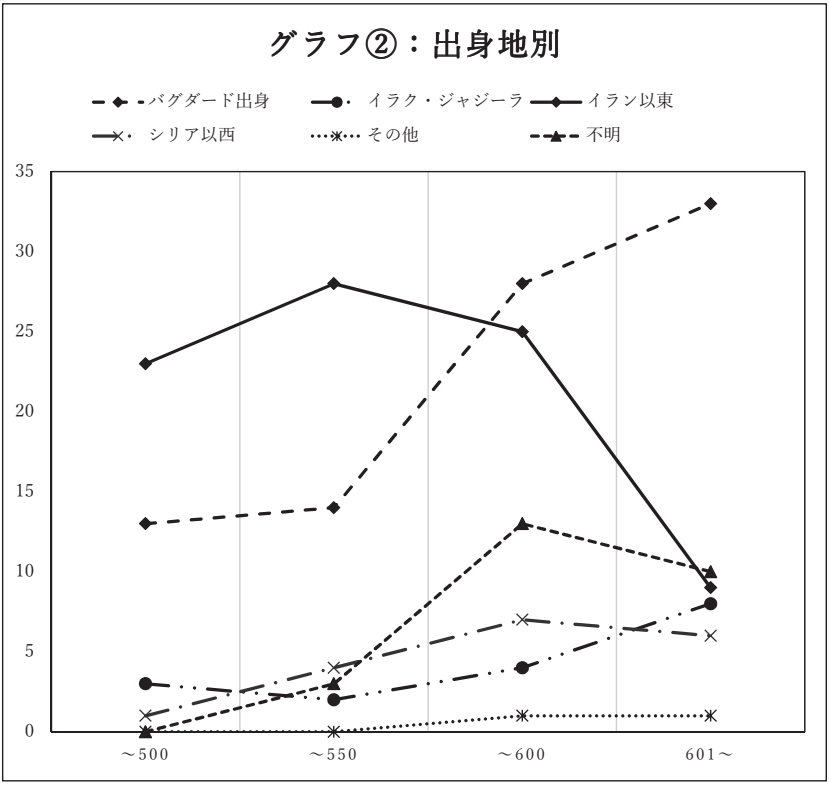
全体ではバグダード出身者が最も多く、イラン以東の出身者がそれに続く。しかし、増減に注目すると、五五〇年を境に前後百年で大きく傾向が変化している。イラン以東の出身者は第二期まで過半数を占めているが、後半はバグダード出身者が急増し、多数派に転じる。これは所属学派の集計で見た、Sh派とHB派の関係に近い。グラフ②に示されるように、イラン以東の出身者にはSh派とHF派が多く、バグダードおよびイラク・ジャジーラ出身者にHB派が多い。このため、出身地と所属学派はよく似た傾向を示した。

（二）職業

職業について記述のある人物は八四名であった。集計の際、複数の職を歴任あるいは兼任した人物は重複して計上した。（表①）

最も多かったのは、マドラサの教授、教授代理、助手で、延べ三三名であった。これと並んでリバートのシャイフとその代理も二二名となっている。アッバース朝後期はマドラサとリバートが多数建設された時期であり、教授職やシャイフ職などに就くことによって一定の手当てを得ながらその道に注力することができ、経済的にウラマーを支えた[24]。

使者としてカリフから諸王朝へ赴き、あるいは逆に諸王朝からカリフへ遣わされた人物が複数確認できる。延べ人数は一八名で、後半になるほど増加している。遣わす側としても信頼でき、また相手に対し礼を欠くことのない立ち居振る舞



	～500	～550	～600	601～	不明	合計
バグダード出身	13	14	28	33	3	91
イラク・ジャジーラ	3	2	4	8	0	17
イラン以東	23	28	25	9	1	86
シリア以西	1	4	7	6	0	18
その他	0	0	1	1	1	3
不明	0	3	13	10	7	33
	40	51	78	67	12	248

表１（職業について）

	第一期	第二期	第三期	第四期	不明	延べ人数
カーディー/その代理	3	3	3	3	1	13
公証人	2	1		4		7
教師/代理/助手	3	5	12	13		33
リバートのシャイフ/その代理	1	4	8	9		22
モスク・廟のイマーム	1		3			4
ワクフの監督者			1	4		5
ヒスバ/その代理				3		3
ハティーブ				6		6
その他の官職				3		3
使者	3	3	4	8		18
他＊	1	1	4	2		8
延べ人数	14	17	35	55	1	122
職業について記述有	11	15	29	28	1	84
職業について記述有の比率	27.5%	29.4%	37.2%	41.8%	8.3%	33.9%
各年代没年者	40	51	78	67	12	248

＊都市のﾗｲｰｽ、ｸﾙｱｰﾝ読誦者、ﾀﾞｰﾙ・ｱﾙﾊﾃﾞｨｰｽのｼｬｲﾌ、商人など

いのできる役割に、ワーイズが選ばれていることは注目に値する。

カーディーとその代理は各期三名ずつ、没年不明者を含め延べ一三名であった[25]。後半、特に第四期になると、ワクフ管財人 nāẓir、ヒスバ職 ḥisba のほか、ワズィールの代理など宮廷に仕える要職に就いた者、中には複数の要職を歴任、兼任する者が散見される。ファーリキー Abū al-Ḥasan al-Fāriqī（六〇三／一二〇六没、Sh派）はニザーミーヤ学院で学び、教授の助手 muʿīd、公証人、ファトワー（法意見）を述べるなど法学者としてのキャリアを重ね、カリフ＝ナースィルの母后ズムッルド・ハートゥーン創設のマドラサの教授を務めた[26]。スフラワスディーの孫であるアブー・サーリフ Abū al-Ṣāliḥ al-Jīlānī（六三三／一二三五没、HB派）は公証人、リバートのシャイフ、マドラサの教授、使者、大カーディーなどを歴任した[27]。イブン・アルジャウズィーの息子ムフイー・アッディーン Muḥyī al-Dīn b. al-Jawzī（六五六／一二五八没、HB派）もまたワクフ、ヒスバ職、執事長 ustādh dār[28]、使者、マドラサの教授など職に就いている[29]。

個々人の優れた資質や能力が前提条件になるが、ワーイズはウラマーとして法学者や教師として、また、宮廷の中でマドラサやリバートをはじめ広く社会で活躍していたことが窺いしれる。

これまで検討してきたワーイズの知的、社会的背景についてまとめる。

修得分野としては、ハディース学に重きが置かれ、次いで法学、文学が多かった。いくつかの先行研究が説教とスーフィズムの結びつきを指摘するように、論理的展開よりは情緒面に訴えるという面では共通する要素はある[30]。しかし、数人の傑出したスーフィーがワアズを行った以外、説教とスーフィズムが強く結びついていたという関係は見られない。

法学派のうち第一期・第二期ではSh派が多数派であったが、第三期に入り減少、第四期にはHB派が逆転する。出身地域でも、バグダード出身者が増加する[31]。

職業については、対象年代を通してカーディー職に就くものは各期三名と少数であったが、時代が下がるにつれて有職

者が増加し、職種も多様になる（平均で約三四％、第四期は約四二％）。優秀なウラマーが多方面で活躍するのと同様にワアズを行っていたと考えられる。

これらの変化は、バグダードを取り巻く政治状況に関係していた。第一期・第二期、セルジューク朝はカリフとバグダードに対して政治・軍事面で強い影響力を及ぼしていた。五〇〇／一一〇六年頃までのバグダード来訪者の中では、イラン以東の出身者、学派ではSh派とHF派が目立って多い。同朝は両派のためのマドラサを建設して著名なウラマーを教授として指名したほか、スルターンやワズィールと同行させる、あるいは使者として派遣するなどして、バグダードを訪れることを後押した。軍事力以外でも、協力的なウラマーを支援することによって、セルジューク朝はその存在感をウラマーの活躍を介して発揮していたのである。この傾向の中にワーイズも含まれていた。

第三章　ワアズの場と状況

ワアズはさまざまな場所で行われ、行為としては簡潔に「ワアズを行った」と記述されることが多い。また、「（某は）ワアズの集会を持っていた」という定期的にワアズを行う機会を持っていたことが窺える表現もある。何処で、誰に対して行ったかが明確な場合は少ない。

場所としては広く「バグダードで」と都市や地域名が挙げられる場合と、「宮殿モスクで」「ニザーミーヤ学院で」のように具体的な場所が示される場合がある。

ワアズが行われた場所を丹念に追っていくと、それぞれの場所の持つ特性と、個々のワーイズの特徴との関連が見いだせる。場について、公共性の高い「会衆モスクとマスジド」、創設目的が明確である「マドラサとリバート」、カリフとその親族の意図でワアズが始められた「カリフと親族の関係地」、邸宅の主とワーイズの個人的な近しさが窺える「個人の

邸宅」、神へ畏れを喚起しやすい「墓と葬儀」の五つを設定して検討する。（表2）

第一節　会衆モスクとマスジド

イブン・ジュバイルが訪れた五八〇／一一八四年当時のバグダードには、会衆モスク（金曜日の集団礼拝が行われるジャーミー）は一一あり、マスジド（それ以外の小モスク）に関しては数が多く概数も不明であったという[32]。そのうち、対象年代当時の政治の中心であったティグリス川東岸の新城壁内[33]には宮殿モスク、城壁外にはマフディー・モスクとスルターン・モスクがあり、西岸にはマンスール・モスクがあった。

（一）宮殿モスク Jāmiʿ al-Qaṣr / Jāmiʿ al-Khilāfa

カリフ宮殿に隣接するモスクで、対象年代を通してバグダード東岸新城壁内の中心となる会衆モスクであった。金曜礼拝を行う以外に、ハディースの伝承や法学のための講座なども開かれていた。

ここでは二三名がワアズを行ったことが判っている。学派別では、Sh派一二名、HB派七名、HF派が一名、A派六名、シーア派二名、学派不明者二名である。人数的にはSh派が多いが、いずれの学派にも開かれたモスクであったといえよう。また、バグダード出身や同地で没したのではない人物が多いことから、一時滞在中にワアズを行ったと考えられる。例えば、アブー・アルムアイヤド Abū al-Muʾayyad al-Ghaznawī（四九八／一一〇四没、A派）は巡礼途中の四九五／一一〇一年にバグダードに入り、一年数ヶ月滞在した。その間に宮殿モスクでワアズを行い、その中でA派を支持した。このことによりHB派との間で騒乱 fitna が起こったとも、一方で驚くほど人気があったとも言われる[34]。バグダードを去った理由は、騒乱を起こしたために追放されたとする史料もある[35]。

バグダード出身ではHB派のイブン・アルバンナー Abū ʿAlī b. al-Bannāʾ（四七一／一〇七八没）と息子のアブー・ナスル Abū Naṣr b. al-Bannāʾ（五一〇／一一一六没）は同モスクとマンスール・モスクにそれぞれ法学、ワアズ、ハディース

のための講座を持っていた。[36]

五四二／一一四七年にガズナウィー（既出、晩年シーア派）は、原因は明らかではないが、同モスクでの集会を禁止され、彼の椅子が撤去された。しかし、翌月に再び集会を許可されている。[37] ガズナウィーはこれより前の五三三／一一三九年にもワアズを禁止されたが、さまざまな人々が彼を熱烈に支持したため、すぐに解禁された。この後はスルターンの館でワアズを行うようになる（後述）。[38]

五五五／一一六〇年、カリフに即位したムスタンジド（在位五五五～六六／一一六〇～七〇）は、Sh派のイブン・シュクラーン Abū al-Faḍā'il b. Shuqrān（五六一／一一六六没）と、同派のアブー・アンナジーブ・アッスフラワルディー、さらにHB派のジーラーニーとイブン・アルジャウズィーに揃って名誉の長衣を与え、宮殿モスクでワアズの集会を持つことを許可した。[39] カリフが個々人のワーイズに許可を出した初めての事例である。

宮殿モスクという場所柄、ワーイズへの集会の禁止やそれを解除した主体は、カリフであったことは疑いないであろう。

（二）マンスール・モスク Jāmi' al-Manṣūr

本稿で扱う時代には失われていたが、かつての円城の四つの門のひとつに由来するバスラ門地区の中心的存在の会衆モスクである。バスラ門地区はHB派支持者が多く、同じく西岸にあるシーア派住民の多いカルフ地区と度々衝突を繰り返していた。このモスクでワアズを行った人物一八名中一三名がHB派である。それ以外の学派の人物が行った事例は五例で、うちSh派またはA派の三名に対し聴衆は強い拒絶反応を示している。

四六一／一〇六八年、ハラースィー Ilkiyā al-Harāsī（五〇四／一一一一没、Sh・A派）は、同モスクのワーイズから罷免され、彼の椅子は粉々に壊された。A派の人々を賞賛し、ハディースの徒は神人同形論者 mushabbiha[40] であると述べたことが原因であったという。[41] 神人同形論者という語はHB派への非難・軽蔑として用いられることがあったことから、ハ

ラースィーはA派を褒め称え、HB派を侮蔑したのである。その後、ハーシム家のイブン・スッカラ Ibn Sukkara al-Hāshimī が後任に決まった[42]。

バクリー Abū al-Qāsim al-Bakrī（四七六／一〇八三没、A派）はバグダード内でA派について述べることを認めるという、ニザーム・アルムルクによる許可証を持参して四七五／一〇八一年に到着した。彼は他の全ての会衆モスクでワアズを行った後、最後にマンスール・モスクでワアズを行いたいと主張した。バスラ門地区の住民はそれを拒むだろうと周囲から言われながら、バクリーはシフナ shiḥna[43] の協力を得て武装したトルコ人を伴い、強引に説教壇に上った。マンスール・モスクの扉を締め切り、誰も出入りができないようにし、そこで「『スライマーンは不信心ではなかった。しかし、悪魔たちは不信心だった』。〔というクルアーンの章句になぞらえて〕アフマド・イブン・ハンバルは不信仰者ではなかった。彼に従う者たちが〔不信仰者〕なのだ」と強烈にHB派を侮蔑した。これに対し、集まっていた人々がバクリーに向かって石などを投げつけた。その中にはハーシム家の人々もいたが、彼らもまた処罰された[44]。

また、五四六／一一五二年のイブン・アルアッバーディー Ibn al-ʿAbbādī（五四七／一一五二没、Sh派）の場合でも、これによく似た構図を見ることができる。同モスクでワアズを行おうとした彼は「それはしてはならない。西岸の人々はHB派以外に与しない」と止められる。しかし、大ナキーブ[45]や執事長は彼に保護を与え、彼は巡礼月五日／三月一四日金曜日に同モスクにやってきた。彼が話し始めたとき、聴衆が騒ぎ出し、掴み合いになるなど混乱を極めた。それでも彼は武装した人々やアッバース朝に仕える高官たちに守られながらワアズを行った[46]。イブン・アルアッバーディーは五四一／一一四六年にスルターン＝サンジャル（在位五一一～五二／一一一八～五七）からの使者としてバグダードに到着し、ラマダーン月には宮殿モスクでフトバを行い[47]、数え切れないほどの人々が集まったとも言われる。また、カリフ＝ムクタフィーからスルターンへの使者として遣わされることもあった[48]。彼はセルジューク朝スルターンとカリフの双方と良好な関係であり、バグダードの住民からも反感を買っていたわけではない。その彼もバスラ門地区住民からは激しく反発され

ている。

HB派以外のワーイズで聴衆から拒絶されなかったのは、ナイサーブーリーal-Ḥasan al-Naysābūrī（五四五／一一五〇没、HF派）である。五三八／一一四三年にスルターン＝マスウードと共にバグダードに到着した。彼は「シャーフィイー派はよいが、アシュアリー派はならぬ。ハナフィー派はよいが、ムウタズィラ派はならぬ。ハンバル派はよいが、神人同形論はならぬ」と言い、各派の始祖を讃えた[49]。彼はスルターンと親しい関係であったが、A派を批判したこと、イブン・アルジャウズィーも彼の講義に参加するほどHB派と友好的であったことから、聴衆は反発しなかったのであろう。

HB派のイブン・アルジャウズィーがワアズを行った場合はどうであろうか。数万人という記述もあるほど聴衆が集まっているが、騒乱が起こったことはない。例えば五七三／一一七七年には彼のワアズを聴いて五三人が悔悛tawbaし、その証に前髪を切ったという[50]。彼がイブン・ジュバイルも絶賛する技量の持ち主であることに加え、HB派と地区住民の密接な関係があったため、聴衆の反応に大きな違いが生じたのであろう。

ワアズがきっかけではないが、HB派内にも対立や揉め事はあった。HB派のカーディーでハディース学の大家であったアブー・ヤァラーAbū Ya'lā b. al-Farrā'（四五八／一〇六六没）が亡くなり、後任には弟子のイブン・アキール（既出）が就いた。HB派の他の年長の候補者を抑えて後任となったことに加え、M派に関心を持ったことから、イブン・アキールは一部のHB派ウラマーから激しく非難され姿を隠さなければならなかった。このバグダード内で身を隠す生活はM派撤回を公に宣言するまで続いた[51]。

以上から、HB派ウラマーとバスラ門地区住民は他の地区では見られないほど強固に結束していたことがわかる。バグダードの秩序維持を担うカリフやスルターン、大ナキーブも住民の意に反して介入することは容易ではなかった[52]。

(三) マフディー・モスクJāmi' al-Mahdī／Jāmi' al-Ruṣāfa

歴代カリフの墓所のあるルサーファ地区にあり、別名ルサーファ・モスクという。東岸では最も古い会衆モスクであ

る。ここでワアズを行ったことがわかっているのは、イブン・アビー・イマーマ Ibn Abī ʻImāma（五〇六／一一一二没）、アンバーリー Abū Manṣūr al-Anbārī（五〇七／一一一三没）、イブン・アルジャウズィーの三名で、いずれもHB派であった。

イブン・アビー・イマーマは、バグダード来訪時に同モスクに金曜礼拝にやってきたニザーム・アルムルクに対しワアズを行った。不正を退け、公正であることを求める訓戒を行い、最後の審判の日を暗示する節を引用した。それを聴いたニザーム・アルムルクは感涙に咽び、百ディーナールを与えようとした。しかし、イブン・アビー・イマーマはカリフ親政を主唱するHB派らしく、セルジューク朝ワズィールからの褒美は受け取らなかった[53]。

アンバーリーは同モスクでワアズを行い、ファトワーも述べたという。また、バグダードの大カーディーを務めたHF派のダーマガーニー Abū ʻAbd Allāh al-Dāmaghānī（四七八／一〇八五没）のもとで公証人を務めたほか、同モスクに近くHF派の優勢なターク門地区のカーディーも務めた[54]。この二例は第一期、セルジューク朝スルターンがカリフの側近人事にも容喙していた時期に相当する。

（四）スルターン・モスク Jāmiʻ al-Sulṭān

五二四／一一三〇年に完成した東岸にある、城壁の外にある会衆モスクである。セルジューク朝歴代スルターンがバグダード滞在時に利用したスルターンの館に隣接して建設された[55]。イブン・アルアッバーディーとガズナウィーが、ここでワアズを行ったことがわかっている。

イブン・アルアッバーディーについては（二）マンスール・モスクでも触れたように、HB派との衝突の原因となる一方で、大勢の聴衆が集まるほど人気もあった。彼は五四一／一一四七年に同モスクで、スルターン＝マスウードに向け信徒に対して行うべき事柄を献言するワアズを行った。この後、外に出た彼は人々から賛同を得たという[56]。

正確な時期は不明だが、ガズナウィーは「シーア派に共感し、異国人たち aʻjām[57] の愛顧を誇りにし、カリフ一門を讃えなかった」ことやワアズの中での発言が原因で宮殿モスクでの説教を禁じられていた。その時、スルターン＝マスウード

から指名され、マスウード自身が臨席する中でガズナウィーはワアズを行い、スルターンを賞揚し、カリフを批判した。[58]

ここでの事例は以上の二例のみであるが、いずれもセルジューク朝の支配地域の出身で、以前からスルターンと友好的な人物であったという点で共通する。ガズナウィーの集会中に、聴衆の一人が説教を中断させたことがある。その時、他の人々がそれに同調した様子はなく、カズナウィーの言動を容認していたと考えられる。スルターン・モスクは、バグダードにありながら一種の飛び地のようにセルジューク朝の勢力下にあったといえよう。

(四) その他のマスジド

小規模なマスジドでワアズを行った人物は九名いる。例えばザイトゥーニー Abū al-Thanā' al-Zaytūnī（五七三／一一七七没）はバスラ門地区住民であったが、東岸の火曜市場地区に居を移し、自身のマスジドでワアズを行ったという。[59] 他にも規模の大小に関わらず、複数のマスジドでワアズが行われたことが窺える。

以上の事例から、各モスクはそれぞれの立地条件や政治的背景によってそこで行われるワアズの傾向が異なっていたことが解る。宮殿モスクであればカリフの、スルターン・モスクであればセルジューク朝スルターンかそのワズィールの許可または承認が必要であった。また、マンスール・モスクの場合はHB派ウラマーとそこに集うバスラ門地区住民の意向がもっとも重要であり、これを無視した行為には激しい反発が生じることがあった。

対象年代中、政治上の中心地はカリフ宮殿のある東岸の新城壁内であった。しかし、新城壁外のスルターン・モスクではカリフ批判が行われ、またバスラ門地区住民とHB派の強い結束によって他の権威を受け付けなかった。ワアズが行われる場、特に会衆モスクでは学派や政治的党派、地区住民といった異なる原理が働いていた。

第二節　マドラサ・リバート

対象年代中、バグダードにはマドラサは三七ヵ所、リバートは二四ヵ所あったことが確認できる。[60]

（一）ニザーミーヤ学院

四五九／一〇六七年に完成したニザーミーヤ学院は、Sh派とA派のマドラサであった。創設者ニザーム・アルムルクは教授の他に、ワアズを行うワーイズ、司書、クルアーン朗誦者、アラビア語を教える文法学者がいることなどを条件として定めた[61]。この規定により、このマドラサにはワーイズが常駐していたと考えられる。

ここでワアズを行った人物は計一八名で、うち一四名がSh派（兼A派六名）、A派一名、不明二名である。Sh派が圧倒的に多いのは、設立の目的に適っている。

対象年代を通して同学院におけるワアズの記述は散見するが、対象年代前半と後半ではその傾向が異なっている。特に前半ここでワアズを行った人物一一名のうち、A派について述べるなどしてHB派と対立、騒乱の原因となった人物が四名いる。これに対し後半六名のうちA派に関する発言が混乱の引き金になった例はない。まず前半の二例を検討する。

クシャイリーAbū Naṣr al-Qushayrī（五一四／一一二〇年没、Sh・A派）は四六九／一〇七六年に、HB派を神人同形論者と結びつけて語った。このことが原因でA派とHB派の間で騒乱が起こり、死傷者が出るほど激化した。同年、クシャイリーはバグダードから追放された[62]。四年後の四七三／一〇八〇年にワーイズたちはディーワーンに集められた。彼らはそこで四年前のクシャイリーの騒乱の原因となった神学や諸学派al-madhāhibについてワアズの中で述べてはならないという制限付きで、再び集会を持つことが許された[63]。

しかし、第一節（二）マンスール・モスクで触れたように、この約二年後にバクリーがこのカリフからの指示を無視する内容の、ニザーム・アルムルクの許可書を持参して来訪する。バグダードのあらゆるモスクでワアズを行い、A派について述べたために騒乱の発端となっている。カリフとセルジューク朝スルターンが、それぞれにその権力の及ぶ範囲をバグダードの人々に示す際、ワーイズを利用した一例であろう。

五三八／一一四三年に同学院のひとつの転換点となる出来事が起こる。スルターン＝マスウードとともにバグダード入

りしたナイサーブーリー（既出）は、同学院にアシュアリーの名が掲げてあることを指摘し「アッラーは地上に神学 al-kalām を現されませんでした」と述べた。それを聴いたスルターン＝マスウードはアシュアリーの名を消し、その場所にシャーフィイーの名を書くことを命じた。[64] これは創設者亡き後、教授を任命してきたセルジューク朝スルターンも、同学院内でA派神学に関する発言を認めないということを示したと言える。アスファラーイーニー Abū al-Futūḥ al-Asfarā'īnī（五三八／一一四三没、Sh・A派）の例を挙げよう。五一六／一一二二年にバグダードに到着し、集会にはカリフが臨席することもあったが、五二一／一一二七年にはハディースについて誤った解釈を述べるなどしたため、鞭打ちの刑に処された。カリフは集会を禁止し、バグダードからの退去を命じた。[65] しかし、五三八／一一四三年、先に述べたアシュアリーの名の撤去の後に戻って来た彼は、再びA派について述べ、市街で騒乱が起こった。この時はガズナウィーがスルターンの元へ赴いて進言し、スルターンがアスファラーイーニーにバグダードからの退去を命じている。[66] 同学院の事柄に関してはスルターンが差配していたことが解る出来事である。

もう一つニザーミーヤ学院にとって重大な出来事が、五四七／一一五二年のスルターン＝マスウードの死去の後に起こった。同学院の教授指名に関して、数年前からカリフとスルターンの間では緊張関係が続いていた。五四五／一一五〇年に以前から同学院でワアズを行っていたアブー・アンナジーブ・アッスフラワルディーは、スルターンから教授に指名された。この時、彼は教授就任に関してカリフ＝ムクタフィーからの承認を希望し、それを得ている。[67] そして五四七／一一五二年、死亡した書家の同学院内に残した私財の処分を巡って揉め事が起きると、アブー・アンナジーブはカリフによって教授から罷免された。彼は復帰を望んだが、カリフから許可は得られず、セルジューク朝のシフナの力添えでその郎党と共に学院に戻り、講義を再開する。この直後、マスウード死去の知らせがバグダードに届き、シフナはティクリートへ逃亡した。カリフはアブー・アンナジーブを改めて罷免・処罰し、自ら選んだイブン・アンニザーム Ibn al-Niẓām al-Ṭūsī（五六一／一一六六没）を教授に据えた。[68] 以後、ニザーミーヤ学院の教授指名はカリフが行うようになった。

この以後の事例を見てみよう。五五六／一一六一年にカズウィーニー Abū al-Khayr al-Qazwīnī（五九〇／一一九四没、Sh・A派）がバグダードに到着した。彼がアーシューラー（ムハッラム月一〇日）の日に同学院でワアズを行った際、聴衆から「『（カルバラーでアリーの息子のフサインを殺害した）ヤズィード・ブン・ムアーウィヤよ、呪われよ』と言うのだ」と要求されたが、「彼はジハードを行う者であった」と応じ、ヤズィートを貶めることを拒否した。すると煉瓦を投げつけられたという。[69] 彼はこの出来事ののち一旦バグダードを離れるが再来し、五六九／一一七三年から五八〇／一一八四年まで同学院の教授を務めた。[70] この間に次節で触れるバドル門でワアズを行うようになる。

六〇一／一二〇五年にHB派法学者でワーイズでもあったハッラーニー ʻAbd al-Munʻim al-Ḥarrānī が死亡した際、同学院で葬儀の礼拝が行われた。[71] 第三期まではSh派以外のウラマーの葬儀に関する記述は見られないが、第四期以降散見する。[72] 六〇〇／一二〇四年第四期に入る頃には、同学院はSh派を掲げたマドラサでありながら、ワアズの集会や葬儀では他の学派にも開かれていたようである。

（二）タージーヤ学院 al-Madrasa al-Tājīya

四八二／一〇八九年にセルジューク朝スルターン＝マリク・シャーのワズィールであったタージュ・アルムルク Tāj al-Mulk（四八五／一〇九二没）が東岸の新城壁内アブラズ門地区に建設したSh派のマドラサである。ここでワアズを行った者は五名で、Sh派三名、HF派一名、学派不明が一名であった。Sh派ではガザーリーの弟アブー・アルフトゥーフ Abū al-Futūḥ al-Ghazālī（五二〇／一一二六没）、[73] 同学院の初代教授の息子で後に教授も務めたシャーシー Abū Muḥammad al-Shāshī（五二八／一一三四没）、そしてトゥースィー Shihāb al-Dīn al-Tūsī（五九六／一二〇〇没、Sh・A派）である。

トゥースィーは五六七／一一七〇年にバグダードに入った。彼は武装した護衛を伴ってワズィールのもとを訪れたが面会を拒否された。[74] また、五六九／一一七三年に同学院で集会を持ち「イブン・ムルジャム[75]はアリーを殺したことについて不信仰者ではない」という発言をした。これを聴いていた人々は激高し、煉瓦を投げて彼を護衛とともに追い出した。こ

の騒ぎは市街に拡大し、トゥースィーは外出を禁じられた。それでも事態は収まらず、全てのワーイズに禁令が出された。のちに大ナキーブが遣わされたが、トゥースィーは「あなたはカリフ宮廷の代理人だが、私は地上における神の代理人である」と発言し、これに対し大ナキーブは「そなたはシャイターンの代理人である」と返したといわれる。これを聴いたカリフはトゥースィーにバグダードからの退去を命じたと、スィブト・イブン・アルジャウズィーは伝える。[76] しかし一方で彼は当時の大カーディーと姻戚関係にあり、史料によっては退去させられたのではなく、単にバグダードを去ったとするものもある。[77] この後、彼はエジプトに移住し、フスタートの会衆モスクでワアズを行うなど大変な人気を集めた。同地で亡くなった際には多くの参列者が集まり、アイユーブ朝スルターン＝アーディルやアミールたちが騎乗して葬列に加わったという。[78]

このように同一人物であっても、周囲からの反応や評価が大きく変わることがあった。

(三) ムスタンスィリーヤ学院 al-Madrasa al-Mustanṣirīya

カリフ自らが創設した最初のマドラサで、六三一／一二三四年に完成した。創設者カリフ＝ムスタンスィル（在位六二三～四一／一二二六～四二）の名を冠する。ティグリス川に面し、カリフ宮殿に隣接した。また、同学院は初めて四法学派を揃えたことでも特筆に価する。[79] それまでの法学派間の不均衡と対立関係を是正することで、カリフはその権力と威光を示すことを意図したと考えられる。[80]

当時バグダードには人材のいなかったML派教授としてサラージュ・アッディーン Sarāj al-Dīn al-Mālikī（六六九／一二七一没）が招聘され、六三三／一二三五～六年に家族、ML派法学者たちと共にイスカンダリーヤから到着した。彼は一二の講義を行い、最後をワアズで締め括った。[81] 唯一、ML派がバグダードでワアズ行ったことが確認できる例である。

(四) その他のマドラサ

大規模なマドラサのほかにも、個人の名を冠したマドラサがあった。これらはウラマーが個人で創設したものと、宮廷

に仕える有力者や、カリフの近親者（主に女性）などが支援する人物のために建設したものがある。前者の例として、Sh派ではアブー・アンナジーブ・アッスフラワルディーが自身で建設したものが挙げられる。後者の例としてはカリフ＝ムクタディーの妃バナフシャー Banafshā（五九八／一二〇二没）がHB派のために創設したものなどがある。このマドラサでは、のちにイブン・アルジャウズィーもワアズを行った。[82]

（五）リバート

スーフィーの修行や宿泊のための施設で、その数はマスジド、マドラサより多かったのではと推測される。レンターガムは六〇〇年以前に確認できるものとして三八か所を上げている。[83] バグダードのスーフィーの大シャイフ shaykh al-shuyūkh のリバートでワアズを行った者が二名、個人のリバートで四名、その他のリバートでは六名を数える。

大シャイフのリバートはバグダードで最初のリバートである。西岸マンスール・モスクの向かいに、建設当時の大シャイフであったザウザニー Abū al-Ḥasan al-Zawzanī（四五一／一〇五九没）のために創設された。彼の没後アブー・サアド・アッスーフィー Abū Sa'd al-Ṣūfī（四七七／一〇八四没）が大シャイフとなり、この間アブー・サアドのリバートとも呼ばれた。このリバートはニーシャープールを始めイラン以東を中心に諸地域からさまざまな人々が訪れた。

大シャイフのリバートには、ニザーミーヤ学院での発言がきっかけでバグダードからの退去を命ぜられたアスファラーイーニーなど、騒動にかかわった人物も滞在したが、同リバートで暴力沙汰になったとの記述はない。[84] アスファラーイーニーに反感を覚えた人々も大シャイフへの敬意ゆえに非難の矛先を収めたのか、当人が反感を買うような活動を自粛したのか、判断するには材料が乏しい。

ハーッサ Khāṣṣa bt. Abī al-Muḥammar al-Anṣārī（五八五／一一八九没）は唯一女性でワアズを行った場所が明らかな人物である。彼女の父親はイブン・アルジャウズィーがハディースを学んだ一人であり、彼女自身はアブー・アンナジーブ・アッスフラワルディーの弟子であったという。東岸アブラズ門地区にあった自分のリバートで「女性たちにワアズを

行った」という。[85]

リバートはスーフィーのシャイフ個人のために、創設者本人あるいは支援する有力者によって設けられた。小規模なマスジドやマドラサと同様に私的領域に近く、公共性は低かったのであろう

第三節　カリフと親族の関係地

ここでは、バドル門と、カリフ＝ナースィルの母后の墓廟について取り上げる。いずれも対象年代後半、カリフが権力を回復して以降、カリフと、母后の指示によってワアズが行われるようになった場所であることにも留意したい。

（一）バドル門 Bāb al-Badr

バドル門は、ティグリス川東岸にあるカリフの宮殿と市街地を分ける周壁に設けられた門のひとつである。[86]五六八年ラジャブ月七日／一一七三年二月二二日にここで初めてワアズを行ったのは、第二節（一）ニザーミーヤ学院でも取り上げたカズウィーニーであった。何人かのアミールが、カリフ＝ムスタディーがカズウィーニーの話を聴くことができるようにと、バドル門で集会を開くようにカリフに求め、カリフが聞き入れた結果である。以後、カリフの指名により、門前の広場に特別に設けられた演壇でワアズが行われた。カリフとその親族は宮殿の見晴台から、門前に集まった聴衆と共にワアズを聴くことができた。当初、アミールたちは他の者に許可しないように望んだが、同月二六日にはイブン・アルジャウズィーもここで話をしている。[87]イブン・ジュバイルが訪れた五八〇／一一八四年、カリフ＝ナースィルの治世に入ってもこの両名の集会は続いていた。

カリフ自身の指名によってこの場所でワアズを行うことは非常な名誉であり、その上報奨も与えられた。イブン・アルジャウズィーは「信徒の長（カリフ）が私の集会以外には御臨席なさらないという話が広まった」と書いており、カズウィーニーへの対抗意識とともに、カリフの臨席を賜ることをいかに名誉と感じていたかが窺える。[88]カリフとしてもワー

イズに自らお墨付きを与えることによって、ウラマーとそれ以外のバグダードの住民の双方に存在感を示したのであろう。

聴衆にとっては雄弁かつ学識豊かなウラマーの話を、カリフや貴顕の人々とともに聴くことができる貴重な機会であり、開門と同時に広場に駆け込むほど心待ちにしていた。[89] カリフにとっても自らの権威や寛容さを集まった聴衆に直接に示すことができる重要な機会であった。例えば五七四年のアーシューラーの日／一一七八年六月二九日に、イブン・アルジャウズィーはカリフ＝ムスタディーに対し、より一層、神を讃え、敬虔であるようにとワアズを行った。これを聴いたカリフは集会の中で喜捨を行い、獄中にあった者に恩赦を与えている。[90]

また、話者の言動によってカリフの権威を高める効果をもたらした。六〇〇／一二〇四年にアブー・アルフトゥーフ・アルカズウィーニー Abū al-Futūḥ al-Qaznawī（六〇一／一二〇三没）はインドのゴール朝からの使者としてバグダードを訪れた。彼はカリフ＝ナースィル臨席のもと、法学者やスーフィーたちの前でワアズを行い、彼を遣わした君主シハーブ・アッディーン・ムハンマドは「比類なき宮廷（＝カリフ宮廷）の下僕である」と述べ、人々の前にゴール朝の恭順を示した。[91] 六〇二／一二〇六年には、ニザーム・アッディーン Niẓām al-Dīn al-Samʻānī（没年不明）がホラズム・シャー朝アラーウ・アッディーンからの使者として到着した。彼はバドル門でワアズを行うことを望み、それを許された。彼は大勢の聴衆を前にアッバース家を賞揚し、カリフ＝ナースィルの治世に神の加護あらんことを祈願している。[92]

カリフ＝ムスタンスィルの治世の六二九／一二三一年、ムハンマド・ワーイズ Muḥammad al-Wāʻiẓ（六五一／一二五三没）とイブン・アンナアール Ibn al-Naʻāl（没年、学派不明）はそれまで行ってきたワアズを禁じられた。直接の原因の記述はない。[93]

バドル門でワアズを行うために、ある種の審査が行われた。六五三／一二五五年、カリフ＝ムスタアスィムはバドル門でワアズを行う者を選考することを命じた。最初にイブン・アンナアールが金曜日にワアズを行ったが、彼は相応しいと

は見做されなかった。金曜日ごとに別の人物がワアズを行い、ジャラール・アッディーン Jalāl al-Dīn b. ʿUkbar（六八一／一二八二没、HB派）が認められた。以後、バグダード陥落までジャラール・アッディーンが集会を持った[94]。彼は当時のワーイズたちのシャイフと呼ばれていたことや、著作名も伝わっており、優れたウラマーとして認められていたことが窺える[95]。一方イブン・アンナアールは、知的背景も社会的背景もほとんど不明である。

バドル門でのワアズが始まった当初は、カリフが臨席し、特に優れた人物だけが選ばれた名誉ある貴重な機会でった。しかし、第四期も後半になるとバドル門に限らず、多数の聴衆が集い、熱狂するような集会の記述は減少する。原因はいくつか考えられる。ひとつは、第一章第二節で概観したように、優秀な人材はマドラサの教授の職や宮廷の要職などに登用され、ワアズ以外の領域で活躍したため。二つ目はバドル門におけるワアズの集会が定例化したことで開催される回数が増え、特別な意味合いを失っていったためと考えられる。

（二）カリフの母の墓廟 Turbat Umm al-Khalīfa

カリフ＝ナースィルの母后ズムッルド・ハートゥーンが生前に、西岸にあるマアルーフ・カルヒーの墓（後述）の向かいに建設した墓廟である。彼女は敬虔な人柄で知られ、多くの寄進行為を行った。この墓廟にはマドラサやリバートが隣接しており、マムルーク朝期以降に多く見られる、墓廟付きの複合型宗教施設の先駆けといえよう[96]。

ここで初めてワアズが行われたのは、おそらく五八八／一一九二年のイブン・アルジャウズィーによるものである。ズムッルド・ハートゥーンは存命であったから、母后本人か、カリフによる人選であった可能性が高い。このとき一三〇人が悔悛し、三人が熱情ゆえにその集会の中で亡くなったという[97]。イブン・アルジャウズィーがワースィトに追放されて五年後に帰還した後、生前最後にワアズを行ったのもこの場所であった[98]。

五八九／一一九三年、ドゥーリー Ibn al-Ball al-Dūrī（六一一／一二一五没・HB派）は木曜日に、イブン・アルジャウズィーは土曜日に同じく母后の墓廟でワアズを行っていた。のちにドゥーリーにも土曜日の集会が許可された際、イブ

ン・アルジャウズィーが来るものと期待して集まった聴衆は違う人物が現れため一時騒然となった。この時は執事長イブン・ユーヌス Ibn Yūnus（五九三／一一九七没）がイブン・アルジャウズィーを連れて来て事態を収拾している。[99]

カリフとカリフの母后から重用されたイブン・ジャウズィーであったが、五九〇／一一九四年、ワースィトに追放された。バグダードとその周辺で権力を回復していたカリフ＝ナースィルは、その治世の半ばでシーア派のワズィールを登用するなど政策方針を転換した。[100] イブン・アルジャウズィーはカリフの政策を批判したために追放されたようである。[101] 彼が追放されていた間、ドゥーリーが土曜日にワアズを行った。

イブン・アルジャウズィーの帰還は、母后に目を掛けられていた、イブン・アルジャウズィーの息子ムフイー・アッディーンの働きかけによって実現した。ムフイー・アッディーンは母后の執り成しでカリフ＝ナースィルに父の窮状を訴え、恩赦を得たのである。[102] 父亡き後、ムフイー・アッディーンが後継者としてカリフの母の墓廟など、さまざまな場所でワアズを行った。また、ナースィル以降の歴代カリフにも重用され、バグダード陥落までヒスバ職、執事長、各王朝への使者など要職を務めた。

セルジューク朝が支配地域を分割、弱体化が進んだ五五〇／一一五五年頃から、アッバース朝カリフは限られた範囲ながら権力を取り戻していた。バドル門と母后の墓廟で多数の聴衆を集めたワアズが行われるようになった時期は、カリフ＝ムスタディーとナースィルの治世と重なる。この場所でワアズを行った人物にHB派が多いのは、カリフとカリフ親政を主唱してきた同派との良好な関係を反映してのことであろう。[103]

第四節　邸宅

これまでの大勢の聴衆に開放された場所とは異なり、カリフの近臣の邸宅、スルターンの館について取り上げる。

（一）カリフの近臣の邸宅

カリフ＝ムクタフィーとムスタンジドにワズィールとして仕えたHB派のイブン・フバイラ Ibn Hubayra（五六〇／一一六五没）は、五四〇年代半ばから自分の邸宅でイブン・アルジャウズィーのためにワアズの集会を開くようになった。民衆もこれを自由に聴けるように取り計らったという。[104] このワズィールの支援によってイブン・アルジャウズィーはカリフからの指名も受ける、名実ともにHB派の有力ウラマーとなったのである。

財庫長 Ṣāḥib al-Makhzan はカリフの私的な財務を管理する、カリフの近臣である。カリフ宮殿に程近い場所に代々の財庫長が住んだ邸宅があったと推測される。五五二／一一五七年に財庫長カマール・アッディーン Kamāl a-Dīn Abū al-Futūḥ al-Rāzī（五五六／一一六一没）は自身の邸宅でイブン・アルジャウズィーにワアズをさせることについてカリフに許可を求めて、認められている。[105]

五七二年のラマダーン月／一一七七年三月中に二回、イブン・アルジャウズィーは財庫長ザヒール・アッディーン Ẓahīr al-Dīn Manṣūr b. ʻAṭṭār（五七五／一一七九没）の邸宅で話をしている。二回ともカリフが臨席し、しかも門を開放し民衆が中に入ることを許している。[106] 五七三年のラマダーン月／一一七八年二～三月も、同じように財庫長の館でワアズの集会が開かれている。[107]

（二）スルターンの館 Dār al-Sulṭān

バグダードを訪れたセルジューク朝のスルターンらが逗留した館で、スルターン・モスクが隣接する。ここでワアズを行ったのは六名で、Sh派三名、HF派二名、シーア派一名であった。スルターンの館でワアズが行われたという記述は、第二期に集中している。

五一五／一一二二年スルターン＝マフムード二世の祖母のための葬儀がスルターンの館で執り行われた際、アブー・アルフトゥーフ・アルガザーリーと、イブン・アフマド Abū Saʻd Ismāʻīl b. Aḥmad（五三二／一一三九没、Sh派）のために椅子が用意され、二人がワアズを行った。[108] アブー・アルフトゥーフはこの葬儀以外にも何度もスルターンの御前でワアズ

を行い、その能弁、博識ともに一目置かれる存在であった。

同年に、HF派のカーディーであるブハーリーAbū al-Qāsim al-Bukhārī（没年不明、HF派）がスルターンとその近臣たちの前でワアズを行った。この後Sh派の面々がブハーリーはSh派を軽んじたとカリフ宮殿に苦情を訴えている。[109] 学派間の対立といえばバグダードではHB派対A派・Sh派が目を引くが、セルジューク朝下のイランの諸都市では、HF派とSh派が激しく対立していた。[110] ブハーリーの一件はセルジューク朝内の対立関係を反映していた。

第五節　墓と葬儀

説教の中でも、ワアズは「人々に日々の中で神への務めを思い起こさせ、神の御前に立つ日（＝審判の日）を恐れさせることが必要である」とされる。[111] 墓と墓地という場所、葬儀という状況は、人の死から審判の日を連想させやすくワアズに適していた。ここでは墓と墓地、葬儀に加え、埋葬地の移動について取り上げる。

（一）イブン・ハンバル墓地　Maqburat al-Imām Aḥmad

HB派の祖イブン・ハンバルの墓は、西岸のハルブ門墓地にある。HB派に属するウラマーの多くはここに埋葬された。埋葬時に限らず、参詣する人は多かったようである。

タミーミーAbū Muḥammad al-Tamīmī（四八八／一〇九五没、HB派）は年四回ラジャブ月、シャアバーン月、アラファの日（巡礼月九日）、アーシューラーにワアズを行なった。[112]

五四二年サファル月／一一四七年七月に「イブン・ハンバルの墓に参詣した者は過ちを赦される」という夢を見た者がいるという噂が広まり、貴人khāṣṣから民衆ʿāmmまでこぞって参詣に出かけた。イブン・アルジャウズィーが墓前で集会を開くと、数千と思われる人々が参加したという。[113]

イブン・アルジャウズィーの孫、スィブト・イブン・アルジャウズィーSibṭ Ibn al-Jawzī（六五四／一二五六没）は、

ダマスクスに居を移してのちHF派法学者、歴史家として大成する。彼がバグダードにいる間、最初に集会を持ったが、五九六／一二〇〇年のイブン・ハンバルの墓前であった。以後、水曜日にここでワアズを行った。[114]

（二）その他の墓・墓地

バグダードには著名なイマーム、ウラマー、スーフィーなどの墓が多数あり、参詣の対象となっていた。

マアルーフ・アルカルヒー（二〇〇／八一五～六没）は有名な禁欲主義者である。彼の墓は西岸にあり、既述のカリフ＝ナースィルの母后の墓廟はこの近くに建てられた。イブン・アルジャウズィーの師イブン・アルザーグーニー（既出）はこの墓前でワアズを行っていた。師の没後は一時、弟子のひとりラーザーニー Abū ʻAlī al-Rādhānī（五四六／一一五一没、HB派）が引き継いだが、イブン・アルジャウズィーはワズィールに直訴し、兄弟子ラーザーニーに替わってここでワアズをする権利を獲得した。[115]

イブン・シャーシール Muẓaffar b. Shāshīr（六〇七／一二一〇没）は「葬儀とルサーファ地区の諸墓廟と諸マスジドと村々でワアズを行った」という。[116] ワアズは都市ばかりではなく村々でも行われてたことが窺える。

（三）葬儀と弔事

カリフやワズィールの葬儀の際、通例三日の間に一人ないし二人がワアズを行った。葬儀を取り計らう側がワーイズを指名することが多かった。

イブン・アルジャウズィーは五五五／一一六〇年にムクタフィーの、五六六／一一七〇年にムスタンジドの、二人のカリフの葬儀の際にワアズを行った。五七三／一一七三年にはワズィール＝アドゥド・アッディーンの葬儀でも、用意された椅子に座ってワアズを行った。[117] また、ムフイー・アッディーンも六二二／一二二五年にカリフ＝ナースィルの葬儀でワアズを行っている。[118] 六四〇／一二四二年、カリフ＝ムスタンスィルが逝去した際には、ムフイー・アッディーンの息子のジャマール・アッディーン Jamāl-al-Dīn b. Muḥyī al-Dīn（六五六／一二五八没）がワアズを行っている。[119]

その他、タヌーヒー Abū Muḥammad al-Tanūkhī（五五七／一一六二没）は大シャイフの[120]、イブン・ヒラール Nāshib b. Hilāl（五九一／一一九五没）は財庫長の葬儀においてワアズを行い、詩を詠んだ[121]。

埋葬地を移す際にもワアズは行われた。五三八／一一四四年に亡くなったワズィール＝シャラフ・アッディーン Sharaf al-Dīn al-Zaynabī は死後、一旦彼の邸宅に埋葬された。五五一／一一五六年に埋葬地を移動する際に複数のワーイズがワアズを行ったという[122]。

この他、スーリー Abū Muḥammad al-Ṣūrī（五二〇／一一二六没、Sh派）やカルヒー Abū Manṣūr al-Karkhī（五九八／一二〇二没、学派不明）などのように、葬儀でワアズを行うことでよく知られた人々もいた[123]。

墓、葬儀におけるワアズは対象時期を通して散見され、時々の社会状況の変化とは関係なく行われていたことを示している。

第六節　承認と拒否

ワーイズに対し聴衆が表した反応について、承認と拒否の表現の形を取り上げる。

（一）椅子と壇

宮殿モスクでのガズナウィー事例ように「彼の椅子」あるいは「彼の壇」という表現が散見される。葬儀の際にもワアズを行う人物のために椅子が用意されたという。話し手と聴衆を区別する以外にも、その人物がその場所でワアズを行うことを承認・保証されていることを示していた。それを撤去あるいは破壊することは、保証した人物が行ったのであれば保証の取り消しを、その権限を持たない聴衆によるものであれば拒否や不承認表明であったとが窺える。四六一／一〇六八年に起こった、マンスール・モスクにあったハラースィーのが座るべき椅子がを破壊された事例（既出）が象徴的である。

（二）合意、受容

出身地以外でワアズを行った者の中には、滞在先で「受け入れられた」、「彼は合意を得た」という記述される例が散見される。例えばアスファラーイーニー（既出）は、五一五／一一二一年にバグダードを再訪した時「彼のもとには貴顕と民衆からの完全な合意が生じた」といわれる。[124] これと対照的な表現が拒否の表現としての、椅子や壇の破壊と考えられる。

受け入れ、合意に関する表現は、他所からバグダードを訪れたワーイズに使われることが多い。[125] 受け入れ、合意をした主体は、椅子や壇を破壊した主体が時折明確ではないように、明示されないことも多い。

ブワイフ朝からセルジューク朝にかけて外来勢力の侵入に遭ったことが、バグダードの住民が外来者、訪問者への警戒心、敵愾心を抱きやすい下地を作ったと考えられる。イブン・ジュバイルが訪問した時、バグダードの住民の性格について「異国の人たちに対しても痛烈な悪口を浴びせ、自分たち以外の者に対して傲慢で横柄な態度を示し」たという。[126] 余所者を容易に受け入れないことが珍しくなかったために受け入れた際には、合意・受容という表現がなされたと考えられる。

おわりに

ワーイズのもつ知的背景、社会的背景と、ワアズが行われた場所と状況について、以下のような結論を得ることが出来る。

まず、ワーイズはウラマーとしての知識を十分に持っていた。加えて個々人の評価を分ける三つの点が挙げられる。一、諸学の正当な知識、二、説教における巧みな表現や弁舌の能力、三、聴衆の側の属する集団と、ワーイズの主張の異

同である。特に三番目の点は同じ人物の同じ主張であっても、その時々の社会状況によって変化したため、ワーイズ個人の評価も一定ではなかった。さらにその時々の聴衆の心性も重要な要素であった。

変化しやすい聴衆の意を汲むことに長けていたのが、イブン・アルジャウズィーであろう。ある時彼は、スンナ派とシーア派の双方からアブー・バクルとアリーの優劣について問われた。答え如何によっては騒乱の発端となるこの問いに対し「二人のうちより優れている者は、彼のもとに彼の娘がいた者である」と応じている。スンナ派はそれを預言者ムハンマドに娘を嫁がせたアブー・バクルであると解釈し、シーア派は預言者の娘アーイシャを妻としたアリーであると解釈し、双方が満足したのである。[127] シーア派の聴衆の要求に応じず騒乱となったトゥースィーの対処とは異なる。このようにワーイズには変化しやすい社会の状況や聴衆の要求を読み取り、当意即妙な対応が出来る技量が必要であった。

ここでイブン・ジュバイルの記述に立ち戻ってみる。当時のバグダードの政治的集団と関わりを持たなかった彼は、イスラーム諸学を学び、詩文、散文にも秀でた一ウラマーとして「客観的」に説教師たちの知識、技量を高く評価したと考えられる。では、何故バグダードのワーイズたちが特に優れていたのであろうか。

本論で扱った時期、バグダードの異なる二つの権力者が存在した。対象年代の前半には強力な軍事力を持たなかったカリフは、己の存在感と権威を効果的に発揮する手段として、HB派を、また弁説優れたワーイズを取り立てたと考えられる。一方、軍事力を有する外来の権力者であるセルジューク朝スルターンは、シーア派ブワイフ朝との違いを明らかにしつつ住民から受け入れられる必要性を感じていたであろう。治安維持のためのシフナを遣わしたことに加え、マドラサを建設してウラマーを支援するなど、善き君主としての姿勢を示した。その延長上でワーイズに様々な機会を与え、バグダードにおいて存在感を示す一助としたものと考えられる。

カリフも支援したイブン・アルジャウズィーやカズウィーニーのほか、スーフィーとしても名高いアブド・アルカーヒルとシハーブ・アッディーンの二人のスフラワルディーやジーラーニーなど、まずイスラームの知識人として諸学に通じ

た、ウラマーも認める逸材がワアズを行ったということが重要である。権力者たるカリフとスルターンは、それぞれの思惑からのワーイズの活動を支援し、民衆もまた彼らなりの期待から熱心に集会に足を運んだ。このことが彼らの評価を引き上げ、ワアズという行為の評価を引き上げた。また、卓越した人物が模範、好例を示すことで、その他のウラマーや後進たちを刺激し、バグダードのワーイズたち全体の技術向上を促す誘因になったと考えられる。

註

（1）*Ibn Jubayr*, p. 185（イブン・ジュバイル『メッカ巡礼記2：旅の出会いに関する情報の備忘』、家島彦一訳註、平凡社（2016）, p. 322）以下、（　）内に家島訳の該当箇所を表記する。

（2）計五回のワアズの集会について、バグダードに関する全記述のうち約半分を当てている。*Ibid*.pp. 181-5 (pp. 310-324)

（3）例えばメディナではサドル・アッディーン・アルフジャンディー（五九二／一一九四没）の説教を聴いて称賛し、翌日には別の集会で説教を始める前にお布施を集める説教師 khaṭīb を目の当たりにして嘆いてる。*Ibid*., p. 185 (p. 322)

（4）*Ibid*., p. 185 (p. 322)

（5）イブン・ジュバイルは説教師に対して動詞 wa'aẓa ／能動分詞 wā'iẓ と並んでしばしば動詞 takallama ／能動分詞 mutakallim を用いている。また、イブン・アルジャウズィーも自らの行為について「私は講話した takallamtu」と記述する。mutakallim についてマクディースィーは「神学 kalām に精通した人物。一一世紀のバグダードでは一般的にアシュアリー派とムウタズィラ派を指す。ハンバル派は反神学者 anti-mutakallim であり、彼らの主張の伝達手段がワアズ wa'ẓ であった」と説明する。しかし、明確に神学者を指す場合を除き、史料における用例に基づいて動詞 wa'aẓa と takallama、能動分詞 wā'iẓ と mutakallim は、ほぼ同義、互換可能であると考え、本稿ではワアズとワーイズとして一括に扱うものとする。cf. George Makdisi, Muslim Institutions of Leaning in Eleventh-Century Baghdad, *BSOAS*, 23（1961）, pp. 1-56; id., *The Rise of Colleges: Institutions of Learning in Islam and the West*. Edinburgh, 1981, p. 303.

（6）Johannes Pedersen, The Islamic Preacher: Wā'iẓ, Mudhakkir, Qāṣṣ, *Ignace Goldziher Memorial Volume*,

Budapest, vol. 1, 1948.

（7） Ibn al-Jawzī, *Kitāb al-Quṣṣāṣ wa al-Mudhakkirīn*, ed. Merlin L. Swartz, Beirut, 1986. 以下、シュワルツの解題を M. L. Swartz 1986 とする。また、シュワルツはその後もイブン・アルジャウズィーに関心を持ち続け、説教におけるレトリックを取り上げた研究も行っている。Merlin L. Swartz, Arabic Rhetoric and the Art of the Homily in Medieval Islam, *Religion and Culture in Medieval Islam*, ed. R. G. Hovannision and G. Sabagh, Cambridge, 1999, pp. 36-65.

（8） Jonathan P. Berkey, Storytelling, Preaching, and Power in Mamulūk Cairo, Mamulūk Studies Review4（1995）, pp. 53-73; id., Tradition, Innovation, and the Social Construction of Knowledge in the Medieval Islamic Near East, *Past and Present*, 146（1995）, pp. 38-65; id., *Popular Preaching and Religious Authority in the Medieval Islamic Near East*, Seattle, 2001.

（9） Vanessa Van Renterghem, *Les Élites bagdadiennes au temps des seldjoukides: étude d'histoire sociale*, Damas, 2015.

（10） Linda G. Jones, Witnesses of God: Exhortatory Preachers in Medieval al-Andalus and the Maghrib, *al-Qantara*, 28-1（2007）, pp. 73-100; id., *The Power of Oratory in the Medieval Muslim World*, Cambridge, 2013.

（11） 塚田絵里奈「後期マムルーク朝社会におけるワーイズの実像：人気説教師クドゥスィーの場合」『西南アジア研究』71（2009）, pp. 28-43.

（12） 甥のシハーブ・アッディーンとともにスフラワルディー教団の名祖とされるスーフィー。ガザーリーに師事した。*Ibn al-Dubaythī*, vol. 4, pp. 296-9; *Ibn al-Athīr*, vol. 11, p. 333; *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 180; *Ibn Khallikān*, vol. 3, pp. 204-5; Menahen Milson, al-Muqaddima, *Kitāb Ādāb al-Murīdīn*, li-Abū al-Najīb ʻAbd al-Qāhir al-Suhrawardī, ed. by Menahen Milson, Jerusalem, 1977, pp. 1-6.

（13） イブン・ジュバイルの『旅行記』（*Ibn Jubayr*）、ハンバル派ウラマーのイブン・アルバンナー Ibn al-Bannā'（四七一／一〇七九没）の『日記』（*Ibn al-Bannā'*）、イブン・アルジャウズィー著の年代記（*al-Muntaẓam*）の一七・一八巻部分は著者の見聞による貴重な記述である。ただし、後者の二著者の史料は、彼らが属したハンバル派法学の主張を反映した評価や叙述を含むため、参照する際には十分な配慮を要する。

（14） 所属学派が不明とした基準は、①法学派別の伝記集（*T.al-Hanābila, al-Subkī* など）で確認できない。②その他の伝記集で神学派、法学派についての記述がないという二条件を満たした場合である。

（15） 六〇〇／一二〇二―三年までが対象。法学教師 Enseignants de *Fiqh* と *Mudarris*-s en madrasa を合算した。Renterghem 2015, Annexes, p. 55: Graphiqu 4-7, Origine géographique des enseignants de fiqh à Bagdad, par maḏhab.

（16） 下山伴子「『反駁の書』の論理構想―537/1142-3 年の

アシュアリー派弾圧をめぐってー」『オリエント』42-2（1999）, pp. 129-145.

（17） ハディース伝承者の場合、多数の伝承経路に名を連ねる大家でなければ、社会的地位はさほど高くなかったようである。cf. Renterghem 2015, p. 135.

（18） *Ibn Jubayr*, p.182（p. 315）

（19） 参考史料ではニスバ（由来名）はジーリー al-Jīlī と記述されるが、*EI*, 2nd ed. や先行研究に倣い、ジーラーニー al-Jīlānī で統一する。

（20） 阿久津正幸「知識を伝達し権威を継承する制度：イスナードの概念と専門職的知識人（ウラマー）に関する社会学的考察」『日本中東学会年報』26-1（2010）, pp. 241-268; 水上遼「イブン・アル＝フワティーの伝える一三世紀後半の集団イジャーザ：バグダード・メッカ間およびバグダード・ダマスクス間の事例から」『オリエント』57-1（2014）, pp. 62-72; 谷口淳一『聖なる学問、俗なる人生：中世のイスラーム学者』山川出版社（2011）, pp. 27-38 などが挙げられよう。

（21） *al-Quṣṣāṣ* pp. 90-1; *al-Muntaẓam*, vol. 16, p. 4.

（22） *Ibn al-Sāʿī*, p. 70.

（23） *al-Bidāya*, vol. 12, p. 205.

（24） Joan Elizabeth Gilbert, Institutionalization of Muslim Scholarship and Professionalization of the ʻULAMĀʾ in Medieval Damascus, *Studia Islamica*, 52（1980）, pp. 105-34; Daphna Ephrat, *A Learned Society in a Period of Transition*, Albany, 2000, pp. 25-31.

（25） レンターガムは公証人一三八名をリスト化し、司法上の役割だけでなく、政治的にも高い地位についていた事例が散見するとする。Renterghem 2015, pp. 175-181, Annexes, p.127-141: Tableau 5-3: *Šāhid*-s bagdadiens de la période seldjoukide.

（26） *al-Bidāya*, vol. 13, p. 44; *Ibn Sāʿī*, p. 188; *Ibn al-Athīr*, vol. 12, p. 24; *al-Mundhirī*, vol. 2, pp. 91-2; *al-Subkī*, vol. 8, pp. 295-6.

（27） *Ibn al-Dubaythī*, vol. 5, pp. 75-6; *Ibn Rajab*, vol. 2, pp. 189-92; *Ibn al-Fuwaṭī*, p. 81; *Ibn al-ʻImād*, vol. 5, pp. 161-2; *Ibn al-Athīr*, vol. 3, pp. 419-20.

（28） ustādh dār、ustādh al-dār など表記され、四／十世紀後半以降のカリフ宮廷において、宮廷全般の事柄に関わったと見られる。ヒラール・サービー著『カリフ宮廷のしきたり』谷口淳一・清水和裕監訳、松香堂（2003）, p. 78 註 299 を参照のこと。

（29） *al-Bidāya*, vol. 13, p. 211; *Ibn al-Dubaythī*, vol. 5, pp. 104-5; *Ibn Rajab*, vol. 2, pp. 258-61; *Mirʾāt.H*, pp. 459, 532; *Ibn al-ʻImād*, vol. 5, pp. 286-7; *al-Dhahabī*, vol. 48, pp. 306-8; *Ibn Khallikān*, vol. 3, p. 142.

（30） J. Pedersen 1953, p. 231; J. P. Berkey 2001, p. 19.

（31） 本稿ではワーイズに限って集計したが、ウラマー全体

の移動について検討した先行研究でも同様の結果が指摘されている。Ephrat 2000, pp. 33-58; Renterghem 2015, Annexes, p.54: Graphique 4-6, Répartition par maḏhab des étudiants et enseignants de fiqh.

(32) *Ibn Jubayr*, p.188 (pp. 332-3)

(33) バグダード建都当初のカリフ宮殿はその形状から円城と呼ばれ、ティグリス川西岸に建設された。まもなく東岸ルサーファ地区に政治の中心地は移動した。それより下流に第二八代カリフ＝ムスタズヒル（在位四八七ー五一二／一〇九四ー一一一八）が建設した新城壁内が、本論文対象年代の中心地である。cf. Ibn al-Jawzī, Manāqib Baghdād, al-Qāhira, 1998; J. Lassner, *The Topography of Baghdād in the Early Middle Ages*, Detroit, 1970; George Makdisi, The Topography of Eleventh-Century Baghdād: Materials and Notes, 1&2, *Arabica* 6 (1959), pp. 178-197, 281-306; Guy Le Strange, *Baghdad during the Abbasid Caliphate*, Connecticu), 1983; Renterghem 2015.

(34) *al-Bidāya*, vol. 12, p. 165; *Ibn al-Athīr*, vol. 10, p. 397; *al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 76; *Mir'āt.H*, pp. 8-9, 13-4; *al-Dhahabī*, vol. 34, pp. 283-4.

(35) 追放されたとする史料は*al-Muntaẓam*と*Mir'āt.H*である。前註参照。

(36) イブン・アルバンナーについては*Ibn Rajab*, vol. 1, pp. 32-7; *al-Dhahabī*, vol. 32, pp. 39-41; *al-Muntaẓam*, vol. 16, p. 200; *T.al-Ḥanābila*, vol. 2, pp. 243-4; George Makdisi, Autograph Diary of an Eleventh-Century Historian of Baghdād, Part 1, *BSOAS*, 18 (1956), pp. 9-31を、アブー・ナスルについては*Ibn Rajab*, vol. 1, pp. 115-6; *al-Dhahabī*, vol. 35, pp. 254-5; *al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 150を参照。

(37) *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 56; G. Makdisi 1981, p. 18.

(38) *al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 336.

(39) *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 141.

(40) アッラーについて擬人的表現を文字通り解釈する立場。ムウタズィラ派に代表される。cf. 塩尻和子『イスラームの倫理 アブドゥル・ジャッバール研究』未来社（2001）

(41) *Ibn al-Bannā'*, part 3, p. 15.

(42) イブン・スッカラ・ハーシミーの経歴等は不明である。*Ibn al-Bannā'*を校訂したMakdisiも解らないとしている。*Ibn al-Bannā'*, part 3, p. 15［tr. p. 31］

(43) アラビア語でシフナ。ペルシア語ではシャフナshahna。セルジューク朝スルターンから遣わされ、治安維持とカリフに対する目付け役の任務を負っていた。cf. 後藤敦子『セルジューク朝時代のシフナ職—バグダードを中心に—』イスラム世界39/40（1993）, pp. 23-43; 清水宏祐『ゴウハル・アーイーンの生涯』東洋学報（1994）, p. 2.

(44) 〔 〕は筆者による補足。*Ibn al-Najjār*, vol. 17, pp. 128-9; *al-Muntaẓam*, vol. 16, p. 224; *Mir'āt.A*, pp. 217-8; *al-Dhahabī*, vol. 32, pp. 171-2; Renterghem 2015, p. 474.

(45) naqīb al-nuqabā'。預言者ムハンマドの子孫 ashrāf の代表者、長。バグダードにはアリー家とハーシム家（＝アッバース家）の二家系があった。大ナキーブはハーシム家のナキーブ。cf. Renterghem 2015, pp. 124-5.

(46) *al-Bidāya*, vol. 12, p. 229; *al-Dhahabī*, vol. 37, p. 29; *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 81; G. Makdisi 1981, p. 16.

(47) 校訂者註によると参照した写本のうち二写本では「khataba〔フトバを行った〕」ではなく「jalasa〔座った、就いた〕」となっているという。al-Muntaẓam, vol. 18, p. 49.

(48) *Ibn al-Athīr*, vol. 11, p. 157; *Ibn Khallikān*, vol. 5, pp. 212-3; al-Muntaẓam, vol. 18, p. 49.

(49) *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 31; *Mir'āt.H*, pp. 183-4.

(50) 悔悛の証として前髪を切るという行為は、他のワーイズの集会においても散見する（cf. *Ibn Jubayr*, p. 219 のカズウィーニーの場合など）。cf. *al-Muntaẓam*, vol.18, p. 236.

(51) *Ibn al-Bannā'*, part 2, p. 241; part 3, p. 21; G. Makdisi 1956, pp. 13-5; id., IBN 'AQĪL, EI.

(52) HB派内にも争いはあり、しばしば揉め事が起こっていた。本文中でも触れたイブン・アキールは同派内の有力者同士の対立の影響やM派の学習会に参加したことから、HB派内から激しい非難を受けていた。このために彼がマンスール・モスクに入ろうとした際に騒動が起こったこともある。前註参照。

(53) *al-Muntaẓam*, vol. 17, pp. 130-2.

(54) *al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 135; *T.al-Ḥanābila*, vol. 2, pp. 257-8; Makdisi 1961, p. 6.

(55) ブワイフ朝時代に建設された王の館 Dār al-Mamlaka が元になっている。cf. *al-Muntaẓam*, vol. 16, p. 298; Le Strange 1983, pp. 178, 231-40, 282, 319-22.

(56) Ibn al-Athīr ではバグダードでワアズを行った際、スルターン＝マスウードが臨席したこと、「民衆 'āmma は仕事を放り出し、先を争って彼の集会に参加した」ことが記述されているが、場所の詳細は不明である。*Ibn al-Athīr*, vol. 11, p. 118; *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 49; *Mir'āt.H*, p. 188.

(57) ペルシア語、トルコ語などアラビア語以外の言語を母語とする人々を指す。ここではセルジューク朝とそれに仕える人々を指している。

(58) *al-Muntaẓam*, vol. 18, pp. 109-10; *Mir'āt.H*, p. 184; *al-Dhahabī*, vol. 38, p. 60.

(59) *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 247; *Ibn al-Dubaythī*, vol. 2, pp. 33-4.

(60) Muṣṭafā Jawād, al-Rubuṭ al-Baghdādīya wa Athr-hā fī al-Thaqāfat al-Islāmīya, *Sumer*, No. 10, pp. 218-49.

(61) 他のマドラサにワーイズに関する規定があったとする史料中の記述は管見の限りない。しかし、イブン・アルジャウズィーやスフラワルディーのマドラサのように、定期的にワアズが行われていたと考えられるマドラサは複数ある。*al-Muntaẓam*, vol. 16, p. 304.

（62）　*Ibn al-Athīr*, vol. 10, pp. 104-5; *al-Muntaẓam*, vol. 16, pp. 181-3; *Mir'āt.A*, pp. 186-91; *al-Dhahabī*, vol. 31, p. 34.

（63）　*al-Muntaẓam*, vol. 16, p. 211.

（64）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 32; *Mir'āt.H*, pp. 184; M. L. Swartz 1986, pp. 26-7.

（65）　*al-Bidāya*, vol. 12, p. 198; *Ibn al-Athīr*, vol. 10, p. 605, vol. 11, pp. 96-7; *al-Muntaẓam*, vol. 17, pp. 210, 245, vol. 18, pp. 35-7; *Mir'āt.H*, pp. 125, 184; *Ibn al-'Imād*, vol. 4, p. 118; *al-Dhahabī*, vol. 36, pp. 8-9, 201, 227; *al-Subkī*, vol. 6, pp. 170-3.

（66）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 31; *Mir'āt.H*, pp. 183-4; *al-Dhahabī*, vol. 37, p. 227.

（67）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 77; M. Milson 1977, p. 4.

（68）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 83; *Mir'āt.H*, p. 212; *al-Dhahabī*, vol. 37, p. 36; *Ibn Khallikān*, vol. 3, pp. 204-5; M. Milson 1977, pp. 4-5.

（69）　*Mir'āt.H*, pp. 443-4; *al-Bidāya*, vol. 13, p. 9.

（70）　*Mir'āt.H*, p. 236.

（71）　*Ibn al-Naǰǰār*, vol. 16, p. 173; *Ibn Rajab*, vol. 2, p. 37; *Abū Shāma*, p. 52.

（72）　カリフの母の墓廟の項で取り上げるドゥーリー（HB派）もその一人である。

（73）　*Ibn al-Dimyāṭī*, p. 80; *al-Muntaẓam*, vol. 17, pp. 237-40; G. Makdisi 1961, p. 26.

（74）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 187.

（75）　スィッフィーンの戦いにおいてアリーがムアーウィヤと調停しようとしたことに反対し、後にアリーの元を離れた人々はハワーリジュ派と呼ばれる。イブン・ムルジャムは同派の一人で、アリーを暗殺した当人。*Mir'āt.H* では、この発言はアーシュラーの日であったとする。*Mir'āt.H*, p. 298.

（76）　*Mir'āt.H* と *al-Muntaẓam* ではトゥースィーと大ナキーブの発言内容が若干異なる。引用は前者に基づいた。*al-Muntaẓam*, vol. 18, pp. 187, 202-3; *Mir'āt.H*, p. 298; *al-Dhahabī*, vol. 39, p. 58.

（77）　*Ibn al-Dubaythī*, vol. 2, p. 84; *al-Mundhirī*, vol. 1, pp. 364-5.

（78）　*Abū Shāma*, pp. 18-9; *Mir'āt.H*, pp. 475-6; *al-Mundhirī*, vol. 1, pp. 364-5; *Ibn al-'Imād*, vol. 4, p. 327; *al-Dhahabī*, vol. 42, pp. 267-9; *Ibn Khallikān*, vol. 4, pp. 223-4.

（79）　*Ibn al-Fuwaṭī*, pp. 80-86; *al-Bidāya*,vol. 13, pp. 139-140.

（80）　Carole Hillenbrand, al-MUSTANṢIR（I）, EI, 2nd ed.; Nājī Ma'rūf, *Ta'rīkh 'Ulamā' al-Mustanṣirīya*, Baghdād, 1976, 3rd ed.

（81）　*Ibn al-Fuwaṭī*, p. 78.

（82）　*Ibn Jubayr*, p. 229（pp. 310-1）

（83）　Renterghem 2015, Annexes, Carte II: Les ribāṭ-s de Bagdad（tentative de localisation）, p. 35; *Tableau 3-1: Ribāṭ-s bagdadiens jusqu' à la fin du vie/xiie siècle*, pp. 87-92.

（96）　*Abū Shāma*, p. 33; *Ibn al-Athīr*, vol. 12, p. 184; *Mir'āt.H*, pp. 513-4; *al-Dhahabī*, vol. 42, pp. 385-6; M. Jawād 1954, pp. 247-8; A. Hartmann, *an-Nāṣir li-Dīn Allāh（1180-1225）: Politik, Religion, Kultur in der späten 'Abbāsidenzeit*, Berlin, 1975, p. 180.

（97）　*Mir'āt.H*, p. 415.

（98）　*Ibn Rajab*, vol. 1, p. 428.

（99）　*Ibn Rajab*, vol. 2, p. 74.

（100）　特にカリフ＝ナースィル時代のシーア派との関係については A. Hartmann1975, pp. 136-172 を参照。

（101）　*Mir'āt.H*, pp. 438-40; *al-Dhahabī*, vol. 41, p. 95; A. Hartmann 1975, pp. 180-95; M. L. Swartz 1986, pp. 34-5.

（102）　*Mir'āt.H*, pp. 409, 459.

（103）　ワーイズ以外に、カリフ＝ムスタディーは五七二／一一七七年にイブン・アルジャウズィーの娘婿アブド・アルワッハーブ 'Abd al-Wahhāb al-'Iyābī を新たなモスクのイマームに指名し（*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 239）、五七四／一一七八年にはムナー Abū al-Fatḥ b. al-Munā のために宮殿モスクに演壇を設けている（*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 249）。

（104）　*Ibn Rajab*, vol. 1, p. 255.

（105）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, pp. 119-20.

（106）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, pp. 230, 231; *Ibn Rajab*, vol. 1, p. 408.

（107）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 239.

（84）　*Ibn al-Athīr*, vol. 10, p. 605; *al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 210.

（85）　スフラワルディーの弟子でもある。*al-Dhahabī*, vol. 41, p. 215; *al-Mundhirī* vol. 1, p. 12.

（86）　*Ibn Jubayr*, p. 183（p. 318）; G. Le Strange 1983, pp. 270-1.

（87）　*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 200; *al-Dhahabī*, vol. 39, p. 43.

（88）　カズウィーニーの批判はイブン・アルジャウズィーの著作の随所に見られる（*al-Quṣṣāṣ*, p. 108 など）。またバドル門でのワアズに関する記述では、カリフが臨席していたことを毎回書いている。*al-Muntaẓam*, vol.18, pp. 200, 214, 218, 235, 238, 250, 253; *al-Dhahabī*, vol. 40, pp. 17, 18, 27.

（89）　*Ibn Jubayr*, p. 183（p. 318）; *al-Muntaẓam*, vol. 18, pp. 200, 214, 218, 235; *al-Dhahabī*, vol. 39, p. 43, vol. 40, p. 17.

（90）　*Ibn Rajab*, vol. 1, p. 408; *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 248; *al-Dhahabī*, vol. 40, p. 24. また五七二年ムハッラム月二日／一一七二年七月一一日の集会で、ある人物が不正を訴えて立ち上がると、カリフはこれに対処する者を遣わしている。*al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 226.

（91）　*Ibn Sā'ī*, pp. 119-20; *al-Dhahabī*, vol. 43, p. 77; *al-Mundhirī*, vol. 2, pp. 57-8.

（92）　*Ibn Sā'ī*, pp. 167-8.

（93）　*Ibn al-Fuwaṭī*, p. 59.

（94）　*Ibn al-Fuwaṭī*, p. 220.

（95）　*Ibn Rajab*, vol. 2, pp. 300-1; *Ibn al-Fuwaṭī*, p. 295.

(108) *al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 192; *Mir'āt.H*, p. 99.
(109) *al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 194.
(110) 五三七／一一四二～三年にレイで起こったA派弾圧は、セルジューク朝内部の法学と神学の論争、政治的勢力の対立とが複雑に絡み合った結果でもあった。cf. 下山伴子前掲論文、pp.129-45.
(111) al-Subkī, *Mu'īd al-Ni'am wa Mubīd al-Niqam*, al-Qāhira, 1993, pp. 112-4.
(112) アーシューラーはシーア派ではフサイン殉教の日であるが、スンナ派では大洪水の後、ノアの箱舟が地上に着いた日とされる。*T.al-Ḥanābila*, vol. 1, p. 250; *al-Muntaẓam*, vol. 17, pp. 19-21; *Mir'āt.M*, pp. 251-2; *Ibn Rajab*, vol. 1, p. 78.
(113) *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 55; *al-Bidāya*, vol. 12, p. 218.
(114) *Mir'āt.H*, p. 468.
(115) *al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 276; *Ibn Rajab*, vol. 1, pp. 180-4.
(116) *Mir'āt.H*, p. 553; *Abū Shāma*, p. 77; *al-Dhahabī*, vol. 43, p. 282; *al-Bidāya*, vol. 13, p. 61.
(117) *al-Muntaẓam*, vol. 18, p. 140, 191, 241.
(118) *al-Dhahabī*, vol. 45, p. 12.
(119) 葬儀中とルサーファ地区の墓廟へ移送する際にワアズを行った。*Ibn al-Fuwaṭī*, p. 131, 137.
(120) *Ibn al-'Imād*, vol. 4, pp. 178-9.
(121) *Ibn al-'Imād*, vol. 4, p. 238.
(122) シャラフ・アッディーンはムスタルシドとムクタフィー、二代のカリフに仕えたワズィール。埋葬地の移動は年代記では五五一／一一五六年に記述があるが、彼の没年時の記述では五四四／一一四九～五〇年に行われたとあり、どちらか確定できない。cf. *al-Muntaẓam*, vol. 18, pp. 34-35, 107.
(123) *al-Dhahabī*, vol. 35, p. 440; *Ibn Sā'ī*, p. 85.
(124) *al-Subkī*, vol.6, p. 172.
(125) 五一六／一一二二年にバグダードを訪問したガズナウィーの例では ṣāra la-hu qabūl と書かれている。*al-Muntaẓam*, vol. 17, p. 210.
(126) *Ibn Jubayr*, p. 180 (p. 304)
(127) *Ibn Khallikān*, vol. 3, pp. 140-2.

（お茶の水女子大大学院博士後期課程単位取得、
平成二五年度退学）